



<指導教員推薦文> 橘航大「自尊心の潜在的指標についての妥当性の検討：顕在指標の系統誤差の除去と収束的証拠の観点から」

著者	清水 裕士
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	137
ページ	180-180
発行年	2021-10-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029845

〈指導教員推薦文〉

社会学部 教授 清水 裕 士

橘 航大 「自尊心の潜在的指標についての妥当性の検討－顕在指標の系統誤差の除去と収束的証拠の観点から－」

推薦理由

本論文は、潜在的自尊心指標が果たして自尊心を正しく測定できているのかについて、その妥当性を検討することが目的である。本論文は、日本とアメリカのデータを取得し、さらに最新の数理モデルを用いた測定手法によって顕在自尊心の系統誤差を取り除いた上で、潜在的指標の妥当性を緻密に検討している。以下に述べるように、卒業研究として非常に高いレベルにあり、学術研究としても価値が高い論文である。

本論文の問題意識は、潜在的自尊心指標が、自尊心を本当に測定できているのかという点にある。先行研究では、潜在自尊心が自尊心を測定できていない、つまり妥当性が低いことが指摘されてきたが、一方で、そのことを心理統計学的な観点から真剣に検討した研究はほとんどみあたらない。

そこで本論文は、項目反応理論と呼ばれる心理統計学の数理モデルを活用し、これまで困難とされてきた反応スタイルバイアスを除去することを試みた。反応スタイルバイアスとは、極端なラベルに反応しやすい、あるいは「どちらともいえない」といった中点に反応しやすい個人差のことである。また反応スタイルバイアスは、日米差があるとされる。そこで、日本人とアメリカ人のデータを両方取得し、反応スタイルバイアスを取り除いた上で、顕在指標と潜在指標の相関関係が本当に低いのかを検証するのが目的であった。結果、依然として相関は低く、潜在的自尊心指標は、「自尊心を測定できていない」可能性が示されたと言える。この成果は、社会心理学だけではなく、心理統計学的な観点がなければ得られない、非常に重要な知見である。

橘氏は、本研究を遂行する上で、数多くの英語で書かれた数理モデルの論文を読み、項目反応理論や統計モデリングの技術を習得した。また、潜在的自尊心を測定するための課題を作成するためのプログラミングや、アメリカでデータを取得するための尺度の翻訳を自ら積極的に行うなど、非常に高いモチベーションで卒業研究に取り組んできた。

以上の理由から、安田賞に値する論文であるといえる。